

源氏物語

真木柱

紫式部

青空文庫

こひしさも悲しきことも知らぬなり真

木の柱にならまほしけれ (晶子)

「帝のお耳にはいつて、御不快に思召すようなことがあってもおそれおおい。当分世間へ知らせないようにしたい」

と源氏からの注意はあっても、右大將は、恋の勝利者である誇りをいつまでも蔭のことはしておかれないふうであつた。時日がたつても新しい夫人には打ち解けたところが見いだせないで、自身の運命はこれほどつまらないものであつたかと、氣をめいらせてばかりいる玉鬘を、大將は恨めしく思いながらも、この人と夫婦になれた前生の因縁が非常にありがたかつた。予想したにも過ぎた佳麗な人を見ては、自分が得なかつた場合にはこのすぐれた人は他人の妻になつているのであると、こんなことを想像する瞬間でさえ胸がどろいた。石山寺の觀世音菩薩も、女房の弁も並べて拝みたいほどに大將は感激していたが、玉鬘からは最初の夜の彼を導き入れた女として憎まれていて、弁は新夫人の居間へ出て行くことを得しないで、部屋に引き込んでいた。仏の御心にもその祈願は取り

上げずにいられまいと思われた風流男たちの恋には効験ききんがなくて、荒削りな大将に石山観音の靈験が現われた結果になった。源氏も快心のこととはこの問題を見られなかったが、もう成立したことであつて、当人はもとより実父も許容した婿を自分だけが認めない態度をとることは、自分の愛している玉鬘のためにもかわいそうであると思つて、新婦の家としてする儀式を華麗に行なつて、婿かしずきも重々しくした。早くそのうちに自邸へ新夫人を引き取つて行きたいと大将は思つていたのであるが、源氏は簡単に良人おつとの家へ移るとしても、そこにはうれしく思つては迎えぬはずの第一夫人もいるのが、玉鬘のために気の毒であるということを理由にしてとめていた。

「何もかも穏やかに行くようにして、双方とも譏そしられたり、恨んだりすることを避けなければならぬ」

と源氏は言うのである。実父の大臣は、この結婚がかえつてあなたのために幸福だと思ふ。忠実な支持者がなくて派手はでな宮仕えに出ては苦しいことであろうと自分は心配でならなかった。助きたい志は十分にあるが、もう後宮には女御にようが出ているのであるから、私としてはどうしてあげようもないのだからと、こんな意味の手紙を玉鬘へ送った。それは真理である。相手が帝でおありになつても、第一の寵ちやうはなくて、ただ御愛人であるにとめら

れて、あやふやな後宮の地位を与えられているようなことは、女として幸福なことではないのである。三日の夜の式に源氏が右大将とおうしゆう応酬した歌のことなどを聞いた時に、内大臣は非常に源氏の好意を喜んだ。皆ともかくも人に知らすまいとした結婚であつたが、まもなくおもしろい新事実として世間はこのことを話題にし出した。帝もお聞きになった。「残念だが、しかしそうした因縁だつた人も、一度自分の決めたことだから後宮にはいることとは違つたないしのかみ尚侍の職は辞める必要がない」

という仰せを源氏へ下された。

十月になつた。神事が多くてないしどころ内侍所が繁忙をきわめる時節で、内侍以下の女官なども長官の尚侍の意見を自邸へ聞きに來たりすることで、はで派手に人の出入りの多くなつた所に、大將が昼も歸らずに暮らしていたりすることで尚侍は困つていた。失恋の悲しみをした人のたくさんある中にもひようぶきよう兵部卿の宮などはことに残念がつておいでになる一人であつた。さひようえのかみ左兵衛督は姉の大將夫人のこともいっしょにして世間体を悪く思つたが、恨みを言つても今さら何にもならぬのを知つて沈黙していた。大將は以前からまじめで通つた人で、過去においては何らの恋愛問題も起こさずに來たことなどは忘れたように、生まれ変わつたような恋の奴やつこの役に満足して、風流男らしく宵曉よあかつきに新夫人の六条院へ出入りする様子を

おもしろく人々は見えていた。玉鬘たまかすらははなやかな心も引き込めて思い悩んでいた。自発的にできた結果でないことは第三者にもわかることであるが、源氏がどう思っているであろうということが玉鬘にはやる瀬なく苦しく思われるのであった。兵部卿の宮のお志が最も深く思われたことなどを思い出すと恥ずかしくやさしい気ばかりがされて、大將を愛することがまだできない。源氏は幾十度となく一步をそこへまで進めようとした自身を引きとめ、世間も疑った関係が美しく清いもので終わったことを思つて、自身ながらも正しくないことはできない性質であることを知った。紫夫人にも、

「あなたは疑つてもいたではありませんか」

と言つたのであった。しかし常識的には考えられないこともする物好きがあるのであるから、この先はどうなることかと源氏はみずから危うく思いながらも、恋しくてならなかつた人であつた玉鬘の所へ、大將のいない昼ごろに行つてみた。玉鬘はずっと病氣のようになつていて、朗らかでいる時間もなくなしておれてばかりいるのであったが、源氏が来たので、少し起き上がつて、几帳きちように隠れるようにしてすわつた。源氏も以前と違つた父の威厳というようなものを少し見せて、普通の話のいろいろした。平凡な大將の姿ばかりを見ているこのごろの玉鬘の目に、源氏の高雅さがつくづく映るについても、意外な運命に従

つている自分がきまり悪く恥ずかしくて涙がこぼれるのであった。繊細な人情の扱われる話になってから、玉鬘は脇きようそく息によりかかりながら、几帳の外の源氏のほうをのぞくようにして返辞を言っていた。少し痩せて可憐かれんさの添った顔を見ながら源氏は、それを他人に譲るとは、自身ながらもあまりに善人過ぎたことであると残念に思われた。

「下り立ちて汲みは見ねども渡り川人のせとはた契らざりしを

意外なことになりましたね」

涙をのみながらこう言う源氏がなつかしく思われた。女は顔を隠しながら言う。

みつせ川渡らぬさきにいかでなほ涙のみをの泡あわと消えなん

源氏は微笑を見せて、

「悪い場所で消えようというのですね。しかし三途さんずの川はどうしても渡らなければならぬいそうですから、その時は手の先だけを私に引かせてくださいますか」

と言った。また、

「あなたはお心の中でわかつていくさるでしょう。類のないお人よしの、そして信頼のできる者は私で、他の男性のすることはそんなものでないことを経験なすつたでしょう」と思うと私はみずから慰めることもできます」

こんなことも言われて、苦しそうに見える玉鬘たまかづらに同情して、源氏は話を言い紛らせました。

「陛下は御同情のされるもつたいない仰せを下さいましたから、形式的にだけでもあなたを参内させようと思つています。家庭の妻になつてしまつては、そうした務めのために御所へ出るようなことは困難らしい。単なる尚侍であることは最初の私の精神とは違つても、三条の大臣はかえつて満足しておいでになることですから安心です」

などと源氏は情味のこもつた話をしていた。身にしむとも思い、恥ずかしいとも聞かれることは多いが、玉鬘はただ涙にとらわれていた。こんなに悲觀的になつてゐるのが哀れで、源氏は恋をささやくこともできなかった。ただ今後の大将と、その一家に対する態度などをよく教えていた。ただそのほうへ行つてしまうことは急に許そうとしないふうが見えた。

御所へ尚侍を出すことで大將は不安をさらに多く感じるのであるが、それを機会に御所から自邸へ尚侍を退出させようと考えてるようになってからは、短時日の間だけを宮廷へ出ることを許すようになった。こんなふうに媚として通つて来る様式などは馴^なれないことで大將には苦しいことであつたから、自邸を修繕させ、いつさいを完全に設けて一日も早く玉鬘を迎えようとばかり思つていた。今日^{きょう}までは邸^{やしき}の中も荒れてゆくに任せてあつたのである。夫人の悲しむ心も知らず、愛していた子供たちも大將の眼中にはもうなかつた。好色な風流男というものは、ただ一人の人だけを愛するのになしに、だれのため、彼のためも考へて思いやりのある処置をとるものであるが、生一本な人のこうした場合の態度には一方の夫人としてはたまるまいと憐^{あわれ}まれるものがあつた。夫人は人に劣つた女性でもなかつた。身分は尊貴な式部卿^{しきぶきやう}の宮の最も大切にされた長女であつて、世の中から敬われてもいた。美人でもあつたが、ひどい物怪^{もののけ}がついて、この何年来は尋常人のようでもないのである。狂つている時が多くて、夫婦の中も遠くなつていたが、なお唯一の妻として尊重していた大將に新しい夫人ができ、それがすぐれた美しい人である点ではなくて、世間も疑つていた源氏との関係もないことであつた清い処女であつた点に大將の愛は強く惹^ひかれてしまつた。それで第一夫人はそれだけの愛を損しているわけである。式部卿の宮はこ

の事情をお聞きになつて、

「今後そうした若い夫人を入れてはで派手に暮らせようとしてゐる邸の片すみに小さくなつて住んでゐるようなことをしては、世間体もよろしくない。私の生きてゐる間はそんな屈辱的な待遇を受けて良人おつとの家にいる必要はない」

と御意見をお言いになつた。御自邸の東の対を掃除そうじさせて、大将夫人の移つて来る場所に決めておいでになるのであつた。親の家ではあつても、良人おつとの愛を失つた女になつて歸つて行くことは、夫人の決心のできかねることであつた。性質の静かな善良な人で、子供らしいおおよしさもある人でいながら、時々人からうとまれるような病的な発作があるのである。住居すまいなども始終だらしなくなつていて、きれいなことは何一つ残つていない家にゐる夫人を、玉鬘の六条院にゐるのとは比べようもないのであるが、青年時代から持ち続けた大将の愛は根を張つていて、一朝一夕に変わるものでも、変えられるものでもないから、今も心では非常に妻を哀れに思つていた。

「ただ昨日今日にできた夫婦でも、貴族の人たちは氣に入らないことも、氣に入らないふうを見せずに済ますものなのだ。全然人を捨ててしまうようなことをわれわれの階級の者ではないものなのだ。あなたには病苦というものがつきまといつていて、それを見るだけで

も気の毒で、私の恋愛問題などを話しておこうとしても話す時がなかったのだよ。以前からあなたと約束していることでしよう、あなたに病気はあっても私は一生あなたというつもりだつて、私はどんな辛抱しんぼうも続けてするつもりなのに、あなたはほかのことを考え出したのですね。別れてしまうようなことは考えずに私を愛してください。子供もあるのだから、その点から言っても私は一生あなたを大事にすると言っているのに、女の人には困った嫉妬しとというものがあつて、私を恨んでばかりあなたはいる。現在だけを見ておれば、あるいはそのほうが道理かもしれないが、私を信用してしばらく冷静に見ていてくれたなら、私のあなたを思う志はどんなものかが理解できる日があるだろうと思う。宮様が不快にお思ひになつて、今すぐにお邸やしきへあなたをつれて帰ろうとお言ひになるのは、かえつてそのほうが軽率なことでないだろうか。實際別れさせてしまおうと思つておいでになるのだろうか。しばらく懲らしめてやろうとお思ひになるのだろうか」

と笑いながら言う大将の様子には、だれからも反感を持たれるのに十分な利己主義者らしいところがあつた。

大将の妾しょうのようにもなつていた木工もくの君や中将の君なども、それ相応に大将を恨めしく思つていたが、夫人は普通な精神状態になつている時で、なつかしいふうを見せて泣いて

いた。

「私を老いぼけた、病的な女だと侮辱なさいますのはごもつともなことですが、そんなお言葉の中に宮様のことをお混ぜになるのを聞きますと、私のような者と親子でおありになるばかりにと思われて宮様がお気の毒でなりません。私はあなたのお噂^{うわさ}を聞くことが近ごろ始まったことでも何でもないのでから、悲しみはいたしません」

と言つて横向く顔が可憐^{かれん}であつた。小柄な人が持病のために痩せ^や衰えて、弱々しくなり、きれいに長い髪が分け取られたかと思うほど薄くなつて、しかもその髪はよく梳^すくこともされないで、涙に固まつているのが哀れであつた。一つ一つの顔の道具が美しいのではなくて、式部卿の宮によく似て、全体に艶^{えん}なところのある顔を、構わないままにしてあつては、はなやかな、若々しいというような点はこの人に全然見られない。

「宮様のことを軽々しくなど私が言うものですか。人に聞かれても恐ろしいようなことを言うものでない」

などと大将はなだめて、

「私の通つて行く所はいわゆる玉の台^{うてな}なのだからね。そんな場所へ不風流な私が入りすることは、よけいに人目を引くことだろうと片腹痛くてね、自分の邸^{やしき}へ早くつれて来よう

と私は思うのだ。太政大臣が今日の時代にどれだけ勢力のある方だというようなことは今さらなことだが、あのりっぱな人格者の所へ、ここの嫉妬騒ぎが聞こえて行くようではあなたに済まない。穏やかに仲よく暮らすように心がけなければならぬよ。宮のお邸へあなたが行ってしまったからといっても、私はやはりあなたを愛するだろう。夫婦の形はどうなっても今さら愛のなくなることはないのだが、世間があなたを軽率なように言うだろうし、私のためにも軽々しいことになる。長い間愛し合ってきた二人なのだから、これからも私のためになることをあなたも考えて、世話をし合おうじやありませんか」とも言った。

「あなたの冷酷なことがいいことか悪いことか私はもう考えません。何とも思いません。ただ私が健全な女でないことを悲しんでいます。宮様がお案じになって、娘の私の名誉などをたいそうにお考えになったり、御煩悶^{はんもん}をなすったりするのがお気の毒で、私は邸へ帰りたくないと思っています。六条の大臣の奥様は私のために他人ではありません。よそで育ったその人が大人^{おとな}になって、養女のために姉の私の良人^{おとこ}を婿に取ったりするということで宮様などは恨んでいらつしやるのですが、私はそんなことも思いませんよ。あちらでしていらつしやることをながめているだけ」

「こんなにあなたはよく筋道の立つ話ができるのだがね。病気の起こることがあって、取り返しもつかないようなことがこれからも起こるだろうと気の毒だね。この問題に六条院の女王によおうは関係していられないのだよ。今でもたいせつなお嬢様のように大臣から扱われていらつしやる方などが、よそから来た娘のことなどに関心を持たれるわけもないのだからね。まあまったく親らしくない継母ままはは様だともいえるね。それなのに恨んだりしていることがお耳にはいつては済まないよ」

などと、終日夫人のそばにいて大將は語っていた。

日が暮れると大將の心はもう静めようもなく浮き立って、どうかして自邸から一刻も早く出たいとばかり願うのであったが、大降りに雪が降っていた。こんな天候の時に家を出て行くことは人目に不人情なことに映ることであろうし、妻が見さかいなしの嫉妬しつとでもするのでもあれば自分のほうからも十分に抗争して家を出て行く機会も作れるのであるが、おおように静かにしていられては、ただ気の毒になるばかりであると、大將は煩悶して格こ子うしおも下ろさせずに、縁側へ近い所で庭をながめているのを、夫人が見て、

「あやにくな雪はだんだん深くなるようですよ。時間だってもうおそいでしょう」

と外出を促して、もう自分といることに全然良人は興味を失っているのであるから、と

めてもむだであると考えているらしいのが哀れに見られた。

「こんな夜にどうして」

と大將は言つたのであるが、そのあとではまた反対な意味のことを、

「当分はこちらの心持ちを知らずに、そばにいる女房などからいろんなことを言われたりして疑ったりすることもあるだろうし、また両方で大臣がこちらの態度を監視していられますものだから、間を置かないで行く必要がある。あなたは落ち着いて、氣長に私を見ていてください。邸^{やしき}へつれて来れば、それからはその人だけを偏愛するように見えることもしないので済むでしょう。今日のように病氣が起こらないでいる時には、少し外へ向いていられるような心もなくなつて、あなたばかりが好きになる」

こんな言つていた。

「家においでになつても、お心だけは外へ行つていては私も苦しゅうございます。よそにいらつしてもこちらのことを思いやつていてさえくだされば私の氷^{こお}った涙も解けるでしょう」

夫人は柔らかに言つていた。火入れを持つて来させて夫人は良人^{おとこ}の外出の衣服に香を焚^たきしめさせていた。夫人自身は構わない着ふるした衣服を着て、ほっそりとした弱々しい

姿で、気のめいるふうにすわっているのをながめて、大將は心苦しく思った。目の泣きはらされているのだけは醜いのを、愛している良人の心にはそれも悪いとは思えないのである。長い年月の間二人だけが愛し合ってきたのであると思うと、新しい妻に傾倒してしまつた自分は軽薄な男である、大將は反省をしながらも、行つて逢おうとする新しい妻を思う興奮はどうすることもできない。心にもない歎息をしながら、着がえをして、なお小さい火入れを袖の中へ入れて香をしめていた。ちようどよいほどに着なれた衣服に身を装うた大將は、源氏の美貌の前にこそ光はないが、くつきりとした男性的な顔は、平凡な階級の男の顔ではなかつた。貴族らしい風采である。侍所に集っている人たちが、「ちよつと雪もやんだようだ。もうおそかろう」

などと言つて、さすがに真正面から促すのでなく、主人の注意を引こうとするようなことを言う声が聞こえた。中將の君や木工などは、

「悲しいことになつてしまいましたね」

などと話して、歎きながら皆床にはいつていたが、夫人は静かにして、可憐なふうからだに身体を横たえたかと思ふうちに、起き上がつて、大きな衣服のあぶり籠の下に置かれてあつた火入れを手につかんで、良人の後ろに寄り、それを投げかけた。人が見とがめる間

も何もないほどの瞬間のことであつた。大將はこうした目にあつてただあきれていた。細かな灰が目にも鼻にもはいって何もわからなくなっていた。やがて払い捨てたが、部屋じゆうにもうもうと灰が立つていたから大將は衣服も脱いでしまった。正気でこんなことをする夫人であつたら、だれも顧みる者はないであろうが、いつもの物怪もののけが夫人を憎ませようとしていることであるから、夫人は氣の毒であると女房らも見ていた。皆が大騒ぎをして大將に着がえをさせたりしたが、灰が髪などにもたくさん降りかかつて、どこもかしこも灰になつた氣がするので、きれいな六条院へこのままで行けるわけのものではなかつた。大將は爪弾つまはじきがされて、妻に対する憎惡ぞうおの念ばかりが心につのつた。先刻愛を感じていた氣持ちなどは跡かたもなくなつたが、現在は荒だてるのに都合のよろしくない時である。どんな悪い影響が自分の新しい幸福の上に現われてくるかもしれないと、大將は夫人に腹をたてながらも、もう夜中であつたが僧などを招いて加持かじをさせたりしていた。夫人が上げるあさましい叫び声などを聞いては、大將がうとむのも道理であると思われた。夜通し夫人は僧から打たれたり、引きずられたりしていたあとで、少し眠つたのを見て、大將はその間に玉鬘たまかざらへ手紙を書いた。

昨夜から容体のよろしくない病人ができました、おりから降る雪もひどく、こんな時に

出て行くことはどうかと、そちらへ行くのをやむなく断念することになりましたが、外界の雪のためでもなく、私の身の内は凍つてしまうほど寂しく思われました。あなたは信じてくださるでしょうが、そばの者が何とかいいかげんなことを忖度して申し上げなかったであろうかと心配です。という文学的でない文章であつた。

心さへそらに乱れし雪もよに一人さえつる片敷の袖

堪えがたいことです。

ともあつた。白い薄うす様に重苦しい字で書かれてあつた。字は能書であつた。大將は學問のある人でもあつた。尚ないしのかみ侍は大將の来ないことで何の痛つうよう痒も感じていないのに、一方は一所懸命な言いわけがしてあるこの手紙も、玉たまかざら鬢は無関心なふうに見てしまつただけであるから、返事は来なかつた。大將は自宅で憂鬱ゆううつな一日を暮らした。夫人はなお今日も苦しんでいたから、大將は修しゅほう法などを始めさせた。大將自身の心の中でも、こしばらくは夫人に発作のないようにと祈つていた。物怪もののけにつかれないほんとうの妻は

愛すべき性質であるのを自分は知っているから我慢ができるのであるが、そうでもなかったら捨てて惜しくない気もすることであろうと大將は思っていた。大將は日が暮れるとすぐに出かける用意にかかったのである。大將の服装などについても、夫人は行き届いた妻らしい世話の十分できない人なのである。自分の着せられるものは流行おくれの調子のそろわないものだ。大將は不足を言っていたが、きれいな直衣のうしなどがすぐまにあわないで見苦しかった。昨夜ゆうべのは焼け通つて焦げ臭いにおいがした。小袖類こそでにもその臭気は移っていたから、妻の嫉妬しつとにあつたことを標榜ひょうぼうしているようで、先方の反感を買うことになるであろうと思つて、一度着た衣服を脱ぬいで、風呂ふろを立てさせて入浴したりなどして大將は苦心した。木工もくの君は主人あるじのために薰物たきものをしながら言う、

「一人こがゐて焦るこがる胸の苦しきに思ひ余れる焰ほのほとぞ見し

あまりに露骨な態度をおとりになりますから、拝見する私たちまでもお気の毒になつてなりません」

袖で口をおおうて言っている木工の君の目つきは大將を十分にとがめているのであつた

が、主人あるじのほうでは、どうして自分はこんな女などと情人關係を作ったのであらうとだけ思っていた。情けない話である。

「うきことを思ひ騒げばさまざまにくゆる煙ぞいとど立ち添ふ

ああした醜態うわさが噂うわさになれば、あちらの人も私を悪く思うようになって、どちらつかずの不幸な私になるだろうよ」

などと歎息たんそくを洩もらしながら大將は出て行つた。中一夜置いただけで美しさがまた加わつたように見える玉鬢であつたから、大將の愛はいつそうこの一人に集まる氣がして、自邸へ帰ることができずにそのままずっと玉鬢のほうにいた。大騒ぎして修法などをしていても夫人の病氣は相變わらず起こつて大声を上げて人をのしるようなことのある報知を得ている大將は、妻のためにもよくない、自分のためにも不名誉なことが必ず近くにいれおそば起こることを予想して、怖ろしがつて近づかないのである。邸へ帰る時にもほかの対やしきに離れていて、子供たちを呼び寄せて見るだけを楽しみにしていた。女の子が一人あつて、それは十二、三になつていた。そのあとに男の子が二人あつた。近年はもう夫婦の間も隔

たりがちに暮らしていたが、ただ一人の夫人として尊重することは昔に変わらなかったのが、こんなふうになったのであるから、夫人ももう最後の時が来たのだと思うし、女房たちもそう見て悲しむよりほかはなかった。

父宮がそのことをお聞きになって、

「そんな冷酷な扱いを受けてもまだ辛抱強^{しんぼう}くあなたはしているのですか。それは自尊心も名誉心もない女のすることです。私の生きている間はまだあなたはそう奴隷的にならないでもいいのです」

と言うお言葉をお伝えさせになって、にわかに迎えをお立てになった。夫人はやつと常態になっていて、自身の不幸な境遇を悲しんでいる時に、このお言葉を聞いたのであったから、今になってまだ父宮のお言葉に従わずここにいて、まったく良人から捨てられてしまふ日を待つことは、現在以上の恥になることであろうなどと思って、実家へ行くことにしたのであった。夫人の弟の公子たちは、左兵衛督^{さひょうえのかみ}は高官であるから人目を引くのを遠慮して、そのほかの中將、侍従、民部大輔^{みんぶだいゆう}などで三つほどの車を用意して夫人を迎えに来たのであった。結局はこうなることを予想していたものの、いよいよ今日限りにこの家を離れなければならぬかと思うと、女房たちは皆悲しくなまって泣き合った。

「これまでのようでないかかり人^{ひと}におなりになるのだから、お狭いところにおおぜいがお付きしていることはできません。幾人かの人だけはお供してあとは自分たちの家へ下がることにして、とにかくお落ち着きになるのを待ちましょう」

などと女房たちは言つて、それぞれの荷物を自宅へ運ばせ、別れ別れになるものらしい。夫人の道具の運ばれる物は皆それぞれ荷作りされて行く所で、上下の人が皆声を立てて泣いている光景は悲しいものであつた。姫君と二人の男の子が何も知らぬふうは無邪氣に家の中を歩きまわっているのを呼んで、夫人は前へすわらせた。

「お母様は不幸な運命でお父様から捨てられてしまったのだから、どちらかへ行つてしまわなければならぬ。あなたがたはまだ小さいのにお母様から離れてしまわなければならぬのはかわいそうだね。姫君はどうなるかしれないお母様だけれど私といつしよにいることになさい。男の子も私について来て、時々ここへ来るようなことだけにしてお父様がかわいがつてくださらないよ。大人になつて出世もできないような不幸の原因にそれになるかもしれないからね。お祖父^{じい}様の宮様のいらつしやる間は、ともかくも役人の端にはしてもらえないにもせよね、お父様が今度親類におなりになつた二人の大臣次第の世の中なのだから、その方たちにきらわれている私についてはおあなたがたは損で、出世などは

できませんよ。そうかといってお坊様になって山や林へはいつてしまうことは悲しいことだからね。それに不自然な出家をしては死んでからのちまで罪になります」

と言つて泣く母を見ては、深い意味はわからないままで子は皆悲しがって泣く。

「昔の小説の中でも普通にお子様を愛していらしやるお父様でも片親ではね、いろんなことの影響を受けてだんだん子供に冷淡になつていくものですよ。そしてこちらの殿様は現在でさえもああしたふうをお見せになるじやありませんか。お子様の将来を思つてくださるようなことはないと思います」

と乳母^{めのと}たちは乳母たちでいつしよに集まつて、悲しんでいた。日も落ちたし雪も降り出しそんな空になつて来た心細い夕べであつた。

「天氣がずいぶん悪くなつて来たそうです。早くお出かけになりませんか」

と夫人の弟たちは急がせながらも涙をふいて悲しい肉親たちをながめていた。姫君は大将が非常にかわいがつている子であつたから、父に逢^あわないままで行つてしまうことはできない、今日父とものを言つておかないでは、もう一度そうした機会はないかもしれないと思つてうつぶしになつて泣きながら行こうとしないふうであるのを夫人は見て、

「そんな氣にあなたのなつていることはお母様を悲しくさせます」

などとなだめていた。そのうち父君は帰るかもしれぬと姫君は思っているのであるが、日が暮れて夜になった時間に、どうして逆にこの家へ大將が帰ろう。

姫君は始終自身のよりかかっていた東の座敷の中の柱を、だれかに取られてしまう氣のするのも悲しかった。姫君は檜皮色ひわだの紙を重ねて、小さい字で歌を書いたのを、笄こうがいの端で柱の破れ目へ押し込んで置こうと思つた。

今はとて宿借れぬとも馴なれ来つる真木の柱はわれを忘るな

この歌を書きかけては泣き泣いては書きしていた。夫人は、

「そんなことを」

と言いながら、

馴れきとは思ひ出いづとも何により立ちとまるべき真木の柱ぞ

と自身も歌つたのであつた。女房たちの心もいろいろなことが悲しくした。心のない庭

の草や木と別れることも、あとに思い出して悲しいことであろうと心が動いた。木工の君は初めからこの家の女房であとへ残る人であった。中将の君は夫人といっしよに行くのである。

「浅けれど石間いはまの水はすみはてて宿守もる君やかげはなるべき

思いも寄らなかつたことです、こうしてあなたとお別れするようになるなどと」

と中将の君が言くと、木工もくは、

「ともかくも石間いはまの水の結ばほれかけとむべくも思ほえぬ世を

何が何だかどうなるのだから」

と言つて泣いていた。

車が引き出されて人々は邸やしきの木立ちのなお見える間は、自分らはまたもここを見る日はないであろうと悲しまれて、隠れてしまうまで顧みられた。住んでいる主人あるじのために家と

別れるのが惜しいのではなくて、家そのものに愛着のある心がそうさせるのである。

大将夫人をお迎えになつて、宮は非常にお悲しみになった。母の夫人は泣き騒いだ。

「太政大臣のことをよい親戚しんせきを持ったようにあなたは喜んでいらつしやいますが、私には前生にどんな仇敵かたきだった人かと思われます。女御にようなどにも何かの場合に好意のない態度を露骨にお見せになりましたが、そのころは須磨すま時代の恨みが忘られないのだろうとあなたがお言いになり、世間でもそう批評されたのでも私には腑ふに落ちなかつたのです。それだのにまた今になつて、養女を取つたりなどして、自分が御寵ちようあい愛なすつて古くなすつた代償にまじめな堅い男を取り寄せて婿にするなどということをやさる。これが恨めしくなくて何ですか」

こう言い続けるのである。

「聞き苦しい。世間から何一つ批難をお受けにならない大臣を、出まかせな雑言ぞうごんで悪く言うのはおよしなさい。聡明そうめいな人はこちらの罪を目前でどうしようとはしないで、自然の罰にあうがよいと考えていられたのだろう。そう思われる私自身が不幸なのだ。冷静にしていられるようで、そしてあの時代の報いとして、ある時はよくしたり、ある時はきびしくしたりしようと考えていられるのだろう。私一人は妻の親だと思ひになつて、いつ

かも驚くべき派手な賀宴を私のためにしてください。まあそれだけを生きがいのあることとして、そのほかのことはあきらめなければならぬのだらう」

と宮がお言いになるのを聞いて、夫人はいよいよ猛り立つばかりで、源氏夫婦への呪いの言葉を吐き散らした。この夫人だけは善良なところのない人であった。

大將は夫人が宮家へ帰ったことを聞いてほんとうらしくもなく、若夫婦の中でもあるような争議を起こすものである、自分の妻はそうした愛情を無視するような態度のとれる性質ではないのであるが、宮が軽率な計らいをされるのであると思つて、子供もあることであつたし、夫人のために世間体も考慮してやらねばならないと煩悶してのちに、こうした奇怪な出来事が家のほうであつたと話して、

「かえつてさつぱりとした気もしないではありませんが、しかしそのままでおとなしく家の一隅に暮らして行けるはずの善良さを私は妻に認めていたのですよ。にわかに無理解な宮が迎えをおよこしになつたのであらうと想像されます。世間へ聞こえても私を誤解させることだから、とにかく一応の交渉をしてみます」

とも言つて出かけるのであつた。よいできの袍を着て、柳の色の下襲を用い、青鈍色の支那の錦の指貫を穿いて整えた姿は重々しい大官らしかった。決して不似合

な姫君の良人おっとでないと女房たちは見ているのであつたが、尚ないしのかみ侍は家庭の悲劇の伝えられたことでも、自分の立場がつかなくなつて、大将の好意がうるさく思われて、あとを見送ろうともしなかつた。

宮へ抗議をしに大将は出かけようとしていたのであつたが、先に邸のほうへ寄つて見た。木工もくの君などが出て来て、夫人の去つた日の光景をいろいろと語つた。姫君のことを聞いた時に、どこまでも自制していた大将も堪えられないようにほろほろと涙をこぼすのが哀れであつた。

「どうしたことだろう。常人でない病氣のある人を、長い間どんなにいたわつて私が来たかがわかつてもらえないのだね。輕薄な男なら今日きょうまでだつて決して連れ添つてはいなかつたろう。でもしかたがない、あの人はどこにいても廃人なのだから同じだ。子供たちをどうしようというのだろう」

大将は泣きながら真木柱の歌を読んでいた。字はまずいが優しい娘の感情はそのまま受け取れることができて、途中も車の中で涙をふきふき宮邸へ向かつた。夫人は逢あおうとしなかつた。

「逢う必要はない。新しい女に心の移つていゝという話は、今度始まつたことでもない。

あの人が若い妻をほしがっている話を聞いてから長い月日もたっている。そんな良人^{おと}の愛があなたへ帰ってくることなどは期待されないことだ。そして健全な女でないという点だけをいよいよ認めさせることになります」

と言う宮の御注意が大将夫人へあったのである。もっともなことである。

「何だか若い夫婦の仲で起こった事件のようで勝手の違った気がします。二人の中には愛すべき子もあるのだからと信頼を持ち過ぎてのんきであつた私のあやまちは、どんな言葉でも許してもらえないだろうと思いますが、それはそれとして穩便にだけはしてください。今後私のほうによくないことがあれば世間も許さないでしょうから、その時に断然としたこういう処置もとられたらいいでしょう」

などと大将は困りながら取り次がせていた。姫君にだけでも逢いたいと言つたのであるが出しそうもない。男の子の十歳^{とお}になつてゐるのは童^{わらわ}殿^{でんじょう}上^{じやう}をしていて、愛らしい子であつた。人にもほめられていて、容貌^{ようぼう}などはよくもないが、貴族の子らしいところがあつて、その子はもう父母の争いに関心が持てるほどになつていた。二男は八つくらいである。かわいい顔で姫君にも似ていたから、大臣は髪をなでてやりながら、

「おまえだけを恋しい形見にこれからは見て行くのだねお父様は」

などと泣きながら言っていた。大將は宮へ御面会を願ったのであるが、

「風邪かぜで引きこもっている時ですから」

と断わられて、きまりが悪くなつて宮邸を出た。二人の男の子を車に乗せて話しながら来たのであったが、六条院へつれて行くことはできないので、自邸へ置いて、

「ここにおいで。お父様は始終来て見ることが出来るから」

と大將は言っていた。悲しそうに心細いふうで父を見送っていたのが哀れに思われて、

大將は予期しなかつた物思いの加わつた氣がしたものの、美しい玉たまかざら鬢と、廃人同様で

あつた妻を比べて思うと、やはり何があつても今の幸福は大きいと感ぜられた。それきり

夫人のほうへ大將は何とも言つてやらなかつた。侮辱的なあの日の待遇がもたらした反動的な現象のように、冷淡にしていると宮邸の人をくやしがらせていた。紫の女王によおうもその情報を耳にした。

「私までも恨まれることになるのがつらい」

と歎なげいているのを源氏はかわいそうに思つた。

「むつかしいものですよ。自分の思いどおりにもできない人なのだから、この問題で陛下も御不快に思おぼしめ召すようだし、兵部卿ひょうぶきょうの宮も恨んでおいでになると聞いたが、あの方

は思いやりがあるから、事情をお聞きになつて、もう了解されたようだ。恋愛問題というものは秘密にしても真相が知れやすいものだから、結局は私が罪を負わないでもいいことになると思つてゐる」

とも言つていた。

大将のものと夫人とのそうしたいきさつはいつそう玉鬘たまかざらを憂鬱ゆううつにした。大将はそれを哀れに思つて慰めようとする心から、尚侍ないしのかみとして宮中へ出ることをこれまでは反対をし続けたのであるが、陛下がこの態度を無礼であると思召すふうもあるし、両大臣もいったん思い立ったことであるから、自分らとしていえば公職を持つ女の良人おととである人も世間にあることであり、構わないことと考へて宮中へ出仕することに賛成すると言ひ出したので、春になつていよいよ尚侍の出仕のことが実現された。男踏歌おとことうかがあつたので、それを機会として玉鬘は御所へ参つたのである。すべての儀式が派手はでに行なわれた。二人の大臣の勢力を背景にしている上に大将の勢いが添つたのであるから、はなばなしになるのが道理である。源宰相中將は忠実に世話をしていた。兄弟たちも玉鬘に接近するよい機会である、誠意を見せようとして集まつて来て、うらやましいほどにぎわしかつた。承香殿じやうかうでんの東のほう一帯が尚侍の曹司そうしにあてられてあつた。西のほう一帯には式部卿の

宮の王女御おうによめがいるのである。一つの中廊下だけが隔てになつていても、二人の女性の氣持ちははるかに遠く離れていたことであらうと思われる。後宮の人たちは競い合つて、ますます宮廷を洗練されたものにしていくようなはなやかな時代であつた。あまりよい身分でない更衣こういなどは多くも出ていなかった。中宮ちゆうぐう、弘徽殿こうきでんの女御、この王女御、左大臣の娘の女御などが後宮の女性である。そのほかに中納言の娘と宰相の娘とが二人の更衣で侍していた。踏歌とうかは女御がたの所へ実家の人がたくさん見物に来ていた。これは御所の行事のうちでもおもしろいにぎやかなものであつたから、見物の人たちも服裝などに華奢かしやを競つた。東宮の母君の女御も人に負けぬ派手はでな方であつた。東宮はまだ御幼年であつたら、そのほうの中心は母君の女御であつた。御前ごぜん、中宮、朱雀院すざくへまわるのに夜が更ふけるために、今度は六条院へ寄ることを源氏が辞退してあつた。朱雀院から引き返して、東宮の御殿を二か所まわつたところに夜が明けた。ほのぼのと白む朝ぼらけに、酔い乱れて「竹たけ河がわ」を歌っている中に、内大臣の子息たちが四、五人もいた。それはことに声がよく容よう貌ぼうがそろつてすぐれていた。童形どうぎやうである八郎君はちろうきみは正妻から生まれた子で、非常に大事がられているのであつたが、愛らしかつた。大将の長男と並んでいるこの二人を尚侍も他人とは思えないで目がとどめられた。宮中の生活に馴なれた女御たちの曹司よりも、新

しい尚侍の見物する御殿の様子の方がはなやかで、同じような物ではあるが、女房の袖そでぐち口の重ねの色目も、ここのがすぐれたように公達きんだちは思った。尚侍自身も女房たちもこうした、悪いことが悪く見え、よいことはことによく見える御所の中の生活をしばらくは続けてみたいと思っていた。どちらでも纏頭てんとうに出すのは定きまった真綿であるが、それらなどにも尚侍のほうのおもしろい意匠が加えられてあつた。こちらはちよつと寄るだけの所なのであるが、はなやかな空氣のうかがわれる曹司であつたから、公達は晴れがましく思い、緊張した踏歌をした。饗きやう応おうの法則は越えないようにして、ことに手厚く演者はねぎらわれたのであつた。それは大将の計らいであつた。大将は禁中の詰め所において、終日尚侍の所へ、

退出を今夜のことにしたいと思います。出仕した以上はなおとどまっていたいと、あなたが考えるであろう宮仕えというものは、私にとって苦痛です。

こんなことばかりを書いて送るのであつたが、玉鬘たまかづらは何とも返事を書かない。女房たちから、

源氏の大臣が、あまり短時日でなく、たまたま上がったのであるから、陛下がもう帰つてもよいと仰せになるまで上がっていて帰るようにとおっしゃいましたことですから。

それに今晚とはあまり御無愛想なことになりませんかと私たちは存じます。

と大将の所へ書いて来た。大将は尚なしいのかみ侍を恨めしがって、

「あんなに言っておいたのに、自分の意志などは少しも尊重されない」

と歎息たんそくをしていた。

兵部卿の宮は御前の音楽の席に、その一員として列席しておいでになったのであるが、お心持ちは平静でありえなかった。尚侍の曹司ばかりが思われになってならないのであった。堪えがたくなつて宮は手紙をお書きになった。大将は自身の直廬じきろのほうにいたのである。宮の御消息であるといつて使いから女房が渡されたものを、尚侍はしぶしぶ読んだ。

深山木みやまぎに翅はねうち交かはしるる鳥のまたなく妬ねたき春にもあるかな

さえずる声にも耳がとどめられてなりません。

とあつた。気の毒なほど顔を赤めて、何と返事もできないように尚侍が思っている所へ帝みかどがおいでになった。明るい月の光にお美しい竜りゅう顔がんがよく拝された。源氏の顔をただそのまま写したようで、こうしたお顔がもう一つあつたのかというような気が玉鬘にされ

るのであった。源氏の愛は深かったがこの人が受け入れるのに障害になるものがあまりに多かった。帝との間にはそうしたものはないのである。帝はなつかしい御様子で、お志であつたことが違つてしまつたという恨みをお告げになるのであつたが、尚侍は恥ずかしくて顔の置き場もない気がした。顔を隠して、お返辞もできないでいると、

「たよりない方だね。好意を受けてもらおうと思つたことにも無関心でおいでになるのですね。何にもそうなのですね。あなたの癖なのですね」と仰せになつて、

「などてかくはひ合ひがたき紫を心に深く思ひ初めけん^そ

濃くはなれない運命だろうか」

若々しくておきれいな所は源氏と同じである。源氏と思つてお話を申し上げようと尚侍は思つた。陛下が好意と仰せられるのは、去年尚侍になつて以来、まだ勤勞らしいことも積まずに、三位に玉鬘を^{さんみ}陞^{しやうじよ}叙されたことである。紫は三位の男子の制服の色であつた。

「いかならん色とも知らぬ紫を心してこそ人はそめけれ

ただ今から改めて御恩を思います」

と尚侍が言うと、帝は微笑をあそばして、

「その今からということがだめになったのだからね。私に抗議する人があれば理論が聞きたい。私のほうが先にあなたを愛していたのだから」

と恨みをお告げになる。言葉の遊戯ではなく皆まじめに思召おぼしめすらしいのであつたから、

尚侍は困つたことであると思つた。自分が陛下の愛に感激しているほんとうの気持ちなどはお見せすべきでない。帝といえども男性に共通した弱点は持つておいでになるのであるからと考へて、玉鬘たまかざらはただきまじめなふうで黙つて侍していた。帝はもう少し突込んだ恋の話もしたく思召してここへおいでになつたのであるが、それがお言い出せにならないうで、そのうち馴なれてくるであらうからと見ておいでになつた。大將は帝が曹司へおいでになつたと聞いて危険がることがいよいよ急になつて、退出を早くするようにとしきりに催促をしてきた。もつともらしい口実も作つて実父の大臣を上手じょうずに賛成させ、いろいろと策動した結果、ようやく今夜退出する勅許を得た。

「今夜あなたの出て行くのを許さなければ、懲りてしまつて、これきりあなたをよこしてくれない人があるからね。だれよりも先にあなたを愛した人が、人に負けて、勝った男の機嫌きげんをとるといふようなことをしている。昔の何とかいった男（時平に妻を奪われた平たいいら貞のさだふみ）の歌、昔せしわがかねごとの悲しきはいかに契りし名残なごりなるらん」のように、まったく悲観的な気持ちになりますよ」

と仰せになつて、真底しんぞこからくやしいふうをお見せになつた。聞こし召したのに数倍した美貌びぼうの持ち主であつたから、初めにそうした思召しはなくなつても、この人を御覧になつては公職の尚侍としてだけでお許しにならなかつたであらうと思われるが、まして初めての事情がそうでもなかつたのであつたから、帝は妬ねたましくてならぬ御感情がおりになつて、最初の求婚者の権利を主張あそばしたくなるのを、あさはかな恋と思われたくないと御自制をあそばして、熱情を認めさせようとしてのお言葉だけをいろいろに下された。こうしてなつてようとあそばす御好意がかたじけなくて、結婚しても自分の心は自分の物であるのに、良人おつとにことごとく与えているものでないのにと玉鬘たまむすは思つていた。輦車れんしゃが寄せられて、内大臣家、大将家のために尚侍の退出に従つて行こうとする人たちが、出立ちを待ち遠しがり、大将自身もむつかしい顔をしながら、人々へ指図さしずをするふうにしてその辺を

歩きまわるまで帝は尚侍の曹司をお離れになることができなかった。

「近衛ちかきまもり 過ぎるね。これでは監視されているようではないか」

と帝はお憎みになった。

九重ここのへに霞隔かすみてば梅の花ただかばかりも匂にほひこじとや

何でもない御歌であるが、お美しい帝が仰せられたことであつたから、特別なもののように尚侍には聞かれた。

「私は話し続けて夜が明かしたいのだが、惜しんでいる人にも、私の身に引きくらべて同情がされるからお帰りなさい。しかし、どうして手紙などはあげたらいいだろう」と御心配げに仰せられるのがもったいなく思われた。

かばかりは風にもつてよ花の枝えに立ち並ぶべき匂にほひなくとも

と言つて、さすがに忘られたくない様子の女に見えるのを哀れに思召しながら、顧みが

ちに帝はお立ち去りになった。

すぐに大將は自邸へ玉鬘たまかざらを伴おうと思つてゐるのであるが、初めから言つては源氏

の同意が得られないのを知つて、この時までには言わずに、突然、

「にわかに風邪かぜ気味になりまして、自宅で養生をしたく存じますが、別々になりましては妻も気がかりでございましょうから」

と穏やかに了解を求めて、大將はそのまま尚ないしのかみ侍をつれて歸つたのであつた。内大臣は婚家へ娘のにわかな引き取られ方を、形式上不満にも思つたが、小さなことにこだわつていては婿の大將の感情を害することになろうと思つて、

「どちらでも私のほうの意志でどうすることもできない娘になつてゐるのですから」

という返事を内大臣はした。源氏は思いがけないことになつたと失望を感じたが、それは無理なことである。玉鬘も心にならない良人おとこを持つたことは苦しいと思ひながらも、盗んで行かれたのであればあきらめるほかはないという氣になつて、大將家へ来たことはじめて心が落ち着いてうれしかった。帝が曹司に長くおいでになつたことで大將が非常に嫉妬しつとしていろいろなことを言うのも、凡人らしく思われて、良人を愛することのできない玉鬘の機嫌きげんはますます悪かつた。式部卿しきぶきょうの宮もあのように強い態度をおとりになつた

ものの、大將がそれきりにしておくことで煩悶はんもんをしておいでになった。大將はもう交渉することを断念したふうである。一方では理想が実現された気になって、明け暮れ玉鬘をかしづくことに心をつかつていた。

二月になった。源氏は大將を無情な男に思われてならなかった。これほどはつきりと玉鬘を自分から引き放すこととは思わずに油断をさせられていたことが、人聞きも不体裁に思われ、自身のためにも残念で、玉鬘が恋しくばかり思われた。宿縁は無視できないものであっても、自身の思いやりのあり過ぎたことからこうした苦しみを買うことになったのであると、日夜面影にその人を見ていた。風流気の少ない大將といることを思つては、手紙で、戯れのようにして今日このごろの気持ちに玉鬘に伝えることも気が置かれて得しなかった。雨がよく降つて静かなころ、源氏はこうした退屈な時間も紛らすことが玉鬘の所でできたこと、その時分の様子などが目に浮かんできて、非常に恋しくなつて手紙を書いた。右近の所へそつとその手紙は送られたのであるが、そうはしながらも右近が怪しく思わないかということも考えられて、思うことはそのまま皆書き続けられなかった。ただ推察のできそうなことだけを書いたのであつた。

かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかに忍ぶや

私も退屈なものですから、いろいろ恨めしくなったりすることがあるのですが、どうしてそれをお聞かせしてよいかわかりません。

などと書かれてあった。人が玉鬘のそばにいない時を見計らって右近はこの手紙を見せた。玉鬘も泣いた。自身の心にも時がたつまみに思い出されることの多い源氏は、感情そのままに、恋しい、どうかして逢^あいたいというのを遠慮しないではならない親であったから、実際問題として考えてもいつ逢えることもわからないので悲しかった。時々源氏の不純な愛撫^{あいぶ}の手が伸ばされようとして困った話などは、だれにも言っていないことであつたが、右近は怪しく思っていた。ほんとうのことはまだわからないようにこの人は思っているのである。返事を、

「書くのが恥ずかしくてならないけれど、あげないでは失望をなさるだろうから」
と言つて、玉^{たま}鬘^{かすら}は書いた。

ながめする軒^{しづく}の雫^{そで}に袖ぬれてうたかた人を忍ばざらめや

それが長い時間でございますから、憂鬱^{ゆううつ}的退屈と申すようなものもつてまいります。失礼をいたしました。

とうやうやしく書かれてあった。それを前に拈^{ひろ}げて、源氏はその雨だれが自分からこぼれ落ちる気もするのであったが、人に悪い想像をさせてはならないと思つて、しいておさえていた。昔の尚侍^{すしやく}を朱雀院の母后が嚴重な監視をして、源氏に逢わせまいとされた時がちょうどこんなのであったと、その当時の苦しさと今を比較して考えてみたが、これは現在のことであるせいか、その時にもまさつてやる瀬ないように思われた。好色な男はみずから求めて苦しみをするものである、もうこんなことに似合わしくない自分でないかと源氏は思つて、忘れようとする心から琴を弾^ひいてみたが、なつかしいふうに弾いた玉鬘^{たままつ}の爪^{つめ}音がまた思い出されてならなかった。和琴^{わこん}を清掻^{すが}きに弾いて、「玉藻^{たまも}はな刈りそ」と歌っているこのふうを、恋しい人に見せることができたなら、どんな心にも動揺の起こらないことはないであろうと思われた。

帝もほのかに御覧になった玉鬘^{たままつ}の美貌^{びぼう}をお忘れにならずに、「赤裳^{あかもた}垂れ引きいにし姿を」
(立ちて思ひゐてもぞ思ふくれなるの赤裳垂れ引き)という古歌は露骨に感情を言つただ

けのものであるが、それを終始お口ずさみになって物思いをあそばされた。お手紙がそつと何通も尚侍の手へ来た。玉鬘はもう自身の運命を悲観してしまつて、こうした心の遊びも不似合いになつたもののように思ひ、御好意に感激したようなお返事は差し上げないのであつた。玉鬘は今になつて源氏が清い愛で一貫してくれた親切がありがたくてならなかつた。

三月になつて、六条院の庭の藤や山吹がきれいに夕映えの前に咲いているのを見ても、まずすぐれた玉鬘の容姿が忍ばれた。南の春の庭を捨てておいて、源氏は東の町の西の対に来て、さらに玉鬘に似た山吹をながめようとした。竹のませ垣に、自然に咲きかかるようになった山吹が感じよく思われた。「思ふとも恋ふとも言はじ山吹の色に衣を染めてこそ着め」この歌を源氏は口ずさんでいた。

思はずも井手の中みち隔つとも言はでぞ恋ふる山吹の花

とも言つていた。「夕されば野辺に鳴くてふかほ鳥の顔に見えつつ忘れなくに」などとも口にしていたが、ここにはだれも聞く人がいなかった。こんなふうに徹底的に恋人と

して玉鬘を思うことはこれが初めてであつた。風変わりな源氏の君と言わねばならない。雁の卵がほかからたくさん贈られてあつたのを源氏は見て、蜜柑や橘の実を贈り物にするようにして卵を籠へ入れて玉鬘へ贈つた。手紙もたびたび送つては人目を引くであろうからと思つて、内容を唯事風に書いた。

お逢いできない月日が重なりました。あまりに同情がないというように恨んではいますが、しかし御良人の御同意がなければ万事あなたの御意志だけではできないことを承知していますから、何かの場合でなければお許しの出ることはなかりと残念に思つています。

などと親らしく言つてあるのである。

おなじ巢にかへりしかひの見えぬかなる人か手ににぎるらん

そんなにまでせずともとくやしがつたりしています。

この手紙を大将も見て笑いながら、

「女というものは実父の所へだつて理由がなくては行つて逢うことをしないものになつて

いるのに、どうしてこの大臣が始終逢えない逢えないと恨んではかしおよこしになるだろう」

こんな批評めいたことを言うのも、玉鬘には憎く思われた。返事を、

「私は書けない」

と玉鬘が渋っていると、

「今日は私がお返事をしよう」

大將が代わろうというのであるから、玉鬘が片腹痛く思ったのはもつともである。

巢隠れて数にもあらぬ雁の子をいづ方にかはとりかくすべき

御機嫌ごきげんをそこねておりますようですからこんなことを申し上げます。風流の真似まねをいたし過ぎるかもしれません。

大將の書いたものはこうであつた。

「この人が戯談じやうだん風に書いた手紙というものは珍品だ」

と源氏は笑つたが、心の中では玉鬘をわが物顔に言っているのを憎んだ。

もとの大将夫人は月日のたつにしたがつて憂鬱ゆううつになつて、放心状態であることも多かった。生活費などはこまごと行き届いた仕送りを大将はしていた。子供たちをも以前と同じように大事がつて育てていたから、前夫人の心は良人おととからまったく離れず唯一の頼みにもしていた。大将は姫君を非常に恋しがつて逢いたく思うのであつたが、宮家のほうでは少しもそれを許さない。少女の心には自身の愛する父を祖父も祖母も皆口をそろえて悪く言い、ますます逢わせてもらう可能性がなくなつていくのを心細がつていた。男の子たちは始終訪ねて来て、尚な侍いしのかみの様子なども話して、

「私たちなどもかわいがつてくださる。毎日おもしろいことをして暮らしていらつしやる」などと云つているのを夫人は聞いて、うらやましくて、そんなふうな朗らかな心持ちで人生を楽しく見るようなことをすればできたものを、できなかった自身の性格を悲しがつていた。男にも女にも物思いをさせることの多い尚侍である。

その十一月には美しい子供さえも玉鬘たまかざらは生んだ。大将は何事も順調に行くと喜んで、愛妻から生まれた子供を大事にしていた。産屋うぶやの祝いの派手はでに行なわれた様子などは書かないでも読者は想像するがよい。内大臣も玉鬘の幸福であることに満足していた。大将の大事にする長男、二男にも今度の幼児の顔は劣つていなかった。頭中とうの将も兄弟としてこの

尚侍をことに愛していたが、幸福であると無条件で喜んでゐる大臣とは違って、少し尚侍のその境遇を物足りなく考えていた。尚侍として君側に侍した場合を想像して、生まれた大将の三男の美しい顔を見ても、

「今まで皇子がいらずしやらない所へ、こんな小皇子をお生み申し上げたら、どんなに家門の名誉になることだろう」

となおこの上のことを言つて残念がつた。尚侍の公務を自宅で不都合なく執とることにして、玉鬘はもう宮中へ出ることはないだろうと見られた。それでもよいことであつた。

あの内大臣の令嬢で尚侍になりたがつていた近江おうみの君は、そうした低能な人の常で、戀愛に強い好奇心を持つようになつて、周囲を不安がらせた。女御にようも一家の恥になるようなことを近江の君が引き起こさないかと、そのことではつとさせられることが多く、神経を悩ませていたが、大臣から、

「もう女御の所へ行かないように」

と止められていたのであつたが、やはり出て来ることをやめない。どんな時であつたか、女御の所へ殿上役人などがおおぜい来ていて選りすぐつたような人たちで音楽の遊びをしていたことがあつた。源げん宰さい相しょう中ちゆう将じやうも来ていて、平生と違つて気軽に女房などとも

話しているのを、ほかの女房たちが、

「やはり出抜けていらつしやる方」

とも評していた時に、近江の君は女房たちの座の中を押し分けるようにして御簾みすの所へ出ようとしていた。女房らは危険に思つて、

「あさはかなことをお言い出しになるのじやないかしら」

とひそかに肱ひじで言い合つたが、近江の君はこのまれな品行方正な若公きんたち達を指さして、
「これでしよう、これでしよう」

と言つて源中将のきれいであることをほめて騒ぐ声が外の男の座へもよく聞こえるのであつた。女房たちが困つて苦しんでいる時、高く声を張り上げて、近江の君が、

「おきつ船よるべ浪路なみぢにただよはば棹さおさしよらん泊まりをしへよ

『たななし小舟漕をぐぎかへり』（同じ人にや恋ひやわたらん）いけないわね』

と言つた。源中将は異様なことであると思つた。女御の所には洗練された女房たちがそろっているはずで、こうした露骨な戯れを言いかける人はないわけであると思つて、考え

てみるとそれは噂うわさに聞いた令嬢であつた。

よるべなみ風の騒がす船人も思はぬ方に磯いそづたひせず

と源中将に言われた。

「そんなことをしては恥知らずです」
とも。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年9月3日作成

2012年5月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

真木柱

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>